



近江の絵馬

大津市歴史博物館
学芸員 和田 光生

1. はじめに

祈る心を託して奉納する絵馬は、手軽で、身近な祈願の方法として、盛んに用いられており、学問の神様と呼ばれる神社に奉納された合格祈願絵馬を見ると、この信仰が生きていることをひしひしと感じさせてくれます。

絵馬の歴史は古く、奈良時代までさかのぼることができます。平城京周辺の発掘調査によって天平9年(737)ごろの絵馬が発見されており、県内でも長浜市の十里町遺跡から平安時代前期の絵馬が見つかっています。

絵馬の成立は、馬への信仰から派生したといわれています。古代、馬は貴重な家畜でしたが、たびたび生きた馬を納めるのも大変なので、替わりに土馬や絵馬が奉納されるようになったといわれています。以来連綿と続けられてきた信仰といえますが、古い時代の絵

馬は残されておらず、現存するほとんどは、江戸時代以降のものです。

著名な社寺に行くと、絵馬堂があったり、本堂や拝殿に掛けられた大きく立派な絵馬を見ることができ、こうした絵馬を、大絵馬とおおえまと呼びます。社寺を信仰する人が、何かの機縁に奉納したことで、小絵馬と変わりませんが、大きなもので様々な画題の絵馬を掛けていることは、参拝者の目を意識したものだといえるようです。美術館などのなかった時代、人々の目に触れるという点で、社寺は一種のギャラリー的な役割も果たしていました。天井を覆わんばかりの絵馬は、信仰の空間を演出する重要な構成要素だったのです。それだけに大切に保存されてきたともいえるでしょう。近江には、西国巡礼の札所をはじめ、人々の信仰を集めた社寺が数多くあり、たくさんの絵馬が残されてきました。ここで



は、その中の一部を紹介することにします。

狩野山楽の描いた二面一對の絵馬

絵馬の画題として、馬は最も一般的なものです。全国に膨大な数のある馬を描いた絵馬の中でも、代表的なものの一つとしてマキノ町海津天神社所蔵の狩野山楽筆の絵馬を挙げることができます。縦65cm横76cm、連銭葦毛（白馬）と茶色の鹿毛馬を描いた二面一對の絵馬で、その年紀から寛永2年（1625）2月、福富藤衛門により奉納されたことが分かります。この絵馬は、枳を杭に見立て、それに繋がれた馬を量感あふれる筆で生き生きと描いており、当時を代表する山楽の力量がいかに発揮された優れた作品です。ちなみに、作者の狩野山楽は、近江出身で狩野永徳に師事し、安土桃山時代を代表する作品を残した人物。この絵馬を描いた時は、山楽67歳に当たり、美術史的にも貴重な作品です。

この絵馬のように、二面一對で馬を描く形式は、江戸時代初めごろまで見られ各地に残されています。近江でも海津天神社のほか、愛東町の百濟寺に天正17年（1589）の年紀をもつ白馬と黒馬の絵馬があります。なぜ二面一對なのか、このことを考える上で、謡曲『絵馬』が一つのヒントを与えてくれます。室町時代後期ごろの成立といわれるこの物語のあらすじを、次に見ておくことにしましょう。

帝の臣下が、節分の夜、伊勢齋宮に行くと、白黒の絵馬を持った老夫婦が、どちらの絵馬を掛けるのかで言い争っています。白馬の絵馬は日照りを、黒馬の絵馬は雨をもたらすもので、結局、両方の絵馬を掛け並べることで五穀豊穰・万民快樂を願おうということになります。そしてこの老夫婦は、自分たちが伊勢の二柱の神である素性を告げて消え、物語の前半は終わります。

古代の記録には、祈雨や止雨など天候に係わる祈願のため、馬を献上したことが記されています。この物語も、そうした信仰を受けて創られたと考えることができるようです。

そして、絵馬を奉納する形式として、二面一對という形が当時定着しており、そこにはこの物語のような背景があったことと想像されます。ただ、百濟寺や海津天神社の絵馬が、物語のような祈願から奉納されたかどうかは分かりません。二面一對という形式が踏襲されただけと考えたほうがよいでしょう。

絵馬奉納の背景 1—大石内蔵介奉納の絵馬—

大津市大石中町の佐久奈度神社には、大石内蔵介が奉納した騎馬武者の絵馬が残されています。縦37cm横51cmの小さな絵馬で、寛永6年（1629）奉納されています。両面には「武運長久息災延命所 施主大石内蔵介敬白」とあり、大石内蔵介が武運長久などを願って自分の姿を描いた絵馬を奉納したことが分かります。大石内蔵介と聞けば、元禄15年（1702）吉良義央を襲い、主君の仇を討った赤穂義士の中心人物、大石良雄を思い浮かべる方がほとんどでしょう。でも奉納された時期と大石良雄が生きた時期には相当なずれがあります。この絵馬は、大石良雄の祖父にあたる大石良勝によって奉納されたものなのです。大石氏は、かつて大石庄を本貫地とする豪族でした。大石良勝は、当時常陸国（茨城県）笠間城主であった浅野長重に仕え、遠く離れた地から故郷の産土神である佐久奈度神社に武運長久を願い絵馬を奉納したのです。



大津市指定文化財 騎馬武者図 佐久奈度神社所蔵
絵馬奉納の背景 2—海外からの絵馬—

近江八幡市の日牟礼八幡宮には、正保4年（1585）に奉納された安南渡海船額と呼ばれ

る絵馬があります。縦65cm横79cmの大きさで、「安南国居住 西村太郎右衛門 菱川孫兵衛筆」と記されています。西村太郎右衛門は、八幡で綿屋を営む豪商西村嘉右衛門（初代）の次男で、時期は不明ですが安南国（現在のベトナム）に渡り貿易に携わっていました。事業が成功し、帰国しようとしたのですが、日本は鎖国状態となり戻ることが不可能となったのです。この絵馬は、望郷の念消えがたく、かなわぬ帰郷を願って、故郷の産土神である日牟礼八幡宮に奉納したといわれており、図柄は御朱印船に乗る太郎右衛門らしき人物が描かれています。結局彼は、絵馬を奉納してから4年後の慶安4年（1651）安南国でその生涯を終えたといえます。この絵馬は、江戸時代初期の海外交通史を考える上で大変貴重な絵馬ですが、この奉納の経緯には若干疑問が残されています。伝えられるところでは、絵馬は、安南国で制作されはるばる送られてきたものか、長崎奉行所で現物が没収されその写しを作成し八幡宮に届けられたか、いずれかであろうといわれています。ここで問題となるのは、菱川孫兵衛なる絵師です。彼は、長崎の絵師と伝えられていますが、京都に菱川孫兵衛と名乗る絵師がいた記録があり、絵馬を描いた人物と同一ではないかとの説もあります。もしそうなら、太郎右衛門にゆかりのある人が、こちらで作らせ本人の替わりに奉納したといえるでしょう。いずれにしろ、近江出身で海外に活躍した西村太郎右衛門に係わる絵馬であることには間違いありません。

彼のように海外までは行けませんが、近江商人は、全国で活躍しており、ゆかりの絵馬が出身地の社寺にいくつも残されています。

近江八幡市の円満寺には、松前（北海道）で活躍し大きな成功をおさめた八幡商人西川伝右衛門が、嘉永4年（1851）奉納した絵馬が残されています。縦103cm横121cmの画面に西川家の持船である舟才船^{ふねざいせん}6艘をいろいろな角度から描いています。作者は、浪華船絵師



重要文化財 安南渡海船額 日牟礼八幡宮所蔵

大和屋、当時の船を知る上で貴重な作品です。円満寺の鎮守社は、金比羅宮であり、航海の安全を祈願して奉納したのでしょうか。

この他、彦根市柳川の大宮神社にも船絵馬が多数奉納されています。柳川と隣の薩摩は、両浜商人と呼ばれ松前で活躍しており、こうした商人達が、出身の産土神に納めたものです。また日野町の馬見岡綿向神社にも日野商人が奉納した多くの絵馬があり、画題は、様々ですが、中でも文化9年（1812）中井源左衛門が奉納した日野祭の祭礼図は、縦206cm横422cmと大きく他を圧倒しています。また曳山が出る以前の祭礼の様子が分かる点でも貴重な作品です。

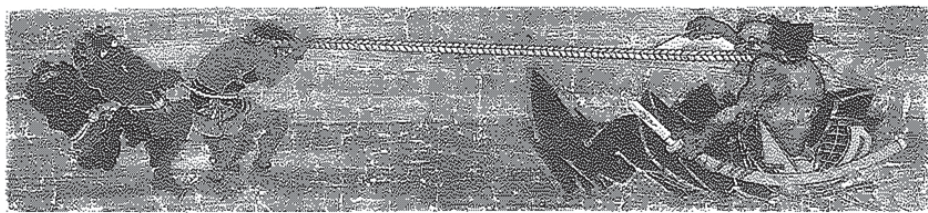
絵馬の画題

馬への信仰より派生したといわれる絵馬ですが、江戸時代以降になると馬に限らず様々な画題が取り上げられるようになります。近江に残された絵馬からいろいろな画題を見てゆくことにしましょう。



近江八幡市指定文化財 北前船図 円満寺所蔵

古くから盛んに奉納されたと思われるものに三十六歌仙図があります。石部町白山神社所蔵の絵馬は、永享8年(1436)銘で板額八面に三十六歌仙を横列に描き、現存する中でもっとも



武人と鬼の首相撲図 園城寺所蔵

古いものです。この他マキノ町海津天神社にも寛永7年(1630)、長谷川左近筆の三十六歌仙が残されており、六面に歌仙が描かれています。歌仙図の絵馬は、歌道の上達を願って奉納されたといわれていますが、海津天神社の絵馬には奉納者の石田少左衛門入道が、諸願成就、子孫繁昌などと記して、歌道とは関係なく納められていたようです。

武者絵、物語を題材にした絵馬も盛んに奉納されました。園城寺(三井寺)観音堂にある文政12年(1829)の武人と鬼の首相撲図は、鎮西八郎為朝が、鬼に出会った時、腕相撲や首引きの勝負に勝って難を逃れた話を題材にしており、細長い画面で、首に紐を掛けて引き合う為朝と鬼がユーモラスに描かれています。木之本町浄信寺の渡辺綱と女人図は、女人に姿を変えた鬼と綱が一条戻橋で出会う場面を描いていますし、このほか渡辺綱の鬼退治図や巴御前、坂上田村麿など当時好まれた物語や武者を題材に絵馬が盛んに奉納されています。また中国の故事を描いた絵馬が、園城寺(三井寺)観音堂に数面納められています。寛政3年(1791)奉納の孔明奇策図もその一面で、大津に住んだ画家紀き棋亭ばいていにより描かれました。

景観や風景を描いた絵馬も見られます。近江八幡市の長命寺には、元禄6年(1693)に江戸中橋の近江屋観音講中より奉納された近江八景図は、近江八景を描いた絵馬として古いものでしょう。また、愛東町百濟寺にある石叟図は、石垣に用いられる大きな石を曳く姿を描いており、人々の表情や装束などの風俗が的確に描かれた興味深い作品です。年紀

はありませんが、江戸初期のものといわれています。園城寺(三井寺)観音堂に奉納された元和3年(1617)園城寺境内図は、高野七左衛門筆で、観音堂や金堂をはじめ園城寺一山を描いた絵馬です。これに関連して高野七左衛門が描いた石突き図や元禄3年(1690)の観音堂落慶図を見ると、焼亡した観音堂の復興過程を追うことができます。とくに石突き図は、縦153cm横384cmの大きな作品で観音堂の基礎となる石を突いている情景を描いており、当時の風俗が見事に書きこまれています。観音堂は、元禄2年に復興されました。

以上は、近江に残る絵馬の形式や奉納の背景、絵馬の画題などの一端に触れたのみで、膨大な絵馬の数に比べればほんの一部です。絵馬はいろいろな立場からアプローチできる情報豊かな資料です。一面一面の絵馬には、その時代背景や奉納する人の立場、その動機、描く絵師の問題、奉納する社寺への信仰、奉納されてからの時間の流れ、こうした複雑な歴史が絡み合って現在に至っています。それだけに、身近な歴史の証人ともいえるでしょう。

ここで使用した写真は、大津市歴史博物館の提供です。また、参考資料としては、大津市歴史博物館『近江の絵馬』や高月町歴史民俗資料館『高月の絵馬』、滋賀県立安曇川文化芸術会館『湖西の絵馬』があります。

滋賀文化財教室シリーズ No.144号

発行年月日 1994年3月1日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525